

藥生漢和

劉米達夫著

藥生漢和

京都大学名誉教授

薬学博士 刈米達夫 著



東京 廣川書店 発行

和 漢 生 藥

定価 ￥ 4,500.—

TATSUO KARIYONE
著 者 刈 米 達 夫

発行者 廣 川 節 男
東京都文京区本郷3丁目27番14号

印刷所 大日本法令印刷株式会社

昭和46年5月15日 初版発行 ©



発 行 所 株 式 会 社 廣 川 書 店

〒113-91 東京都文京区本郷3丁目27番14号

電 話 東京〔03〕(814)5561(代表)

振 替 東 京 8 2 6 9 4 番

自然科学書協会員・高等教科書協会員

Hirokawa Publishing Co.

27-14, Hongō-3, Bunkyo-ku, Tokyo

3047-005600-7123

原色口絵 1



(1) ベニバナ

(p. 11)



(2) カノコソウ

(p. 28)



(3) スイカズラ

(p. 32)



(4) アカヤジオウ

(p. 39)

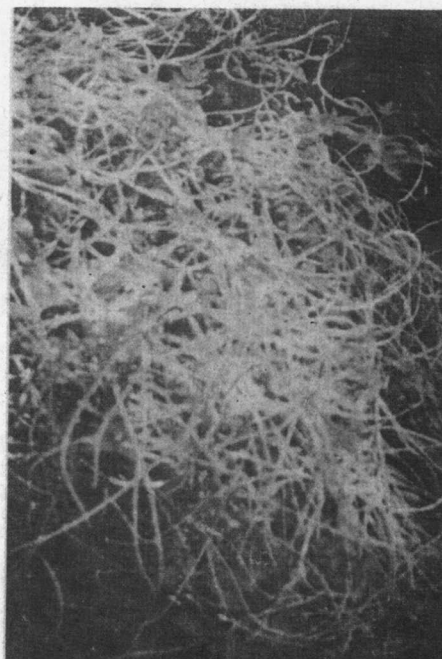


(5) クコ

(p. 43)

(88 .q)

ヤシロシタ (S) •



(6) マメダオシ

(p. 64)

(11 .q)

ナシニシ (I)



(7) チクセツニンジン

(p. 103)

(88 .q)

ヤシロシタ (S)



(8) シクンシ

(p. 110)

(88 .q)

ヤシロシタ (S)



(9) ブッソウゲ (p. 127)



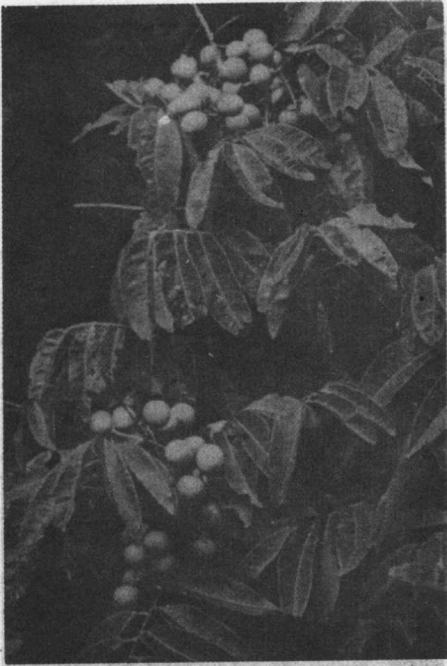
(10) ナツメ (p. 130)



(11) ケンボナシ (p. 130)



(12) ニシキギ (p. 131)



(13) ムクロジ

(p. 135)



(14) ナンバンアカアズキ (p. 175)



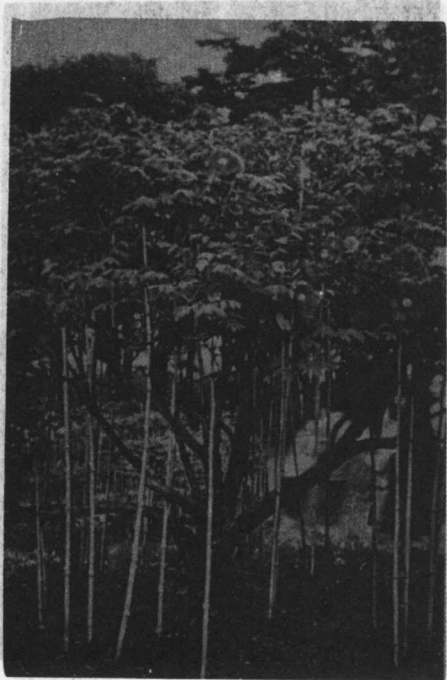
(15) アンズ

(p. 180)



(16) シャクヤク

(p. 197)



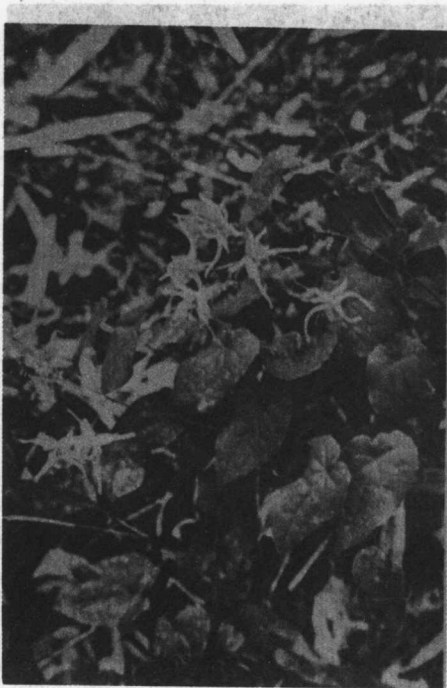
(17) ボタン

(p. 199)



(18) コウホネ

(p. 209)



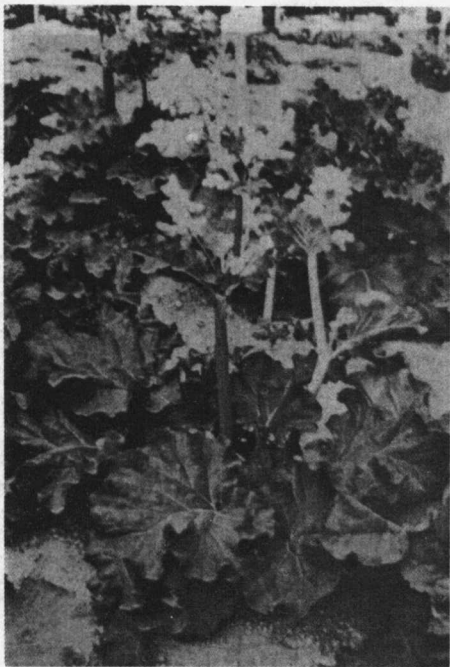
(19) イカリソウ

(p. 214)



(20) ハナトリカブト

(p. 218)



(21) カラダイオウ (p. 245)



(22) アイ (p. 248)



(23) オオバナセッコク (p. 257)
(園芸品 根岸和一氏寄贈)



(24) ゲットウ (p. 261)



(25) ウコン

(p. 264)



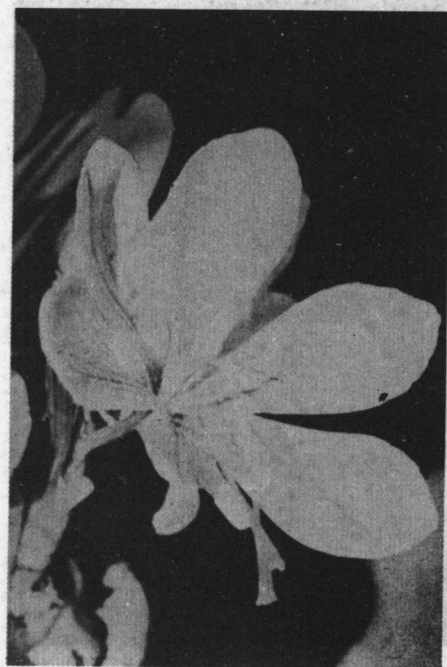
(26) サンナ

(p. 269)



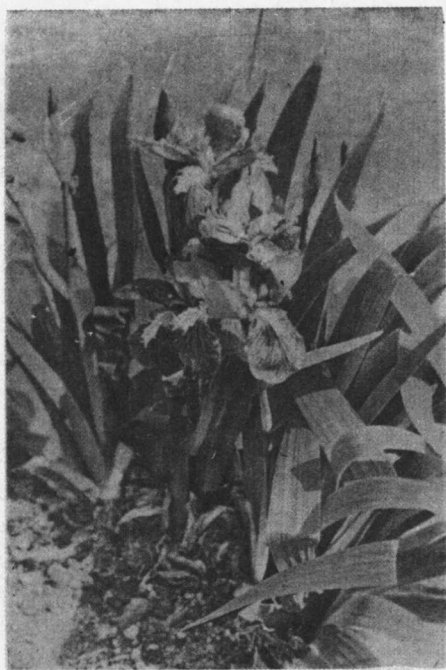
(27) ハトムギ

(p. 280)



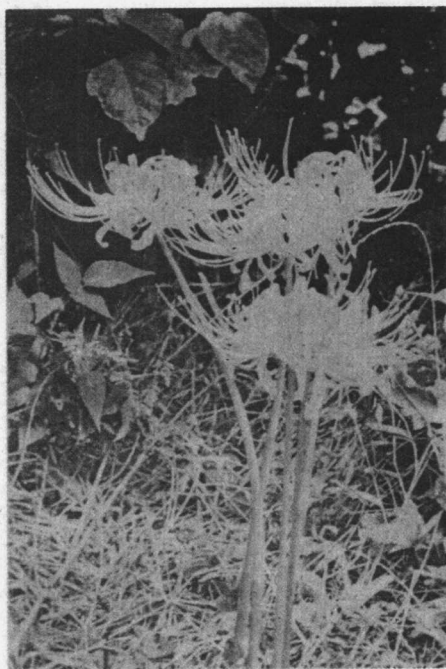
(28) サフラン

(p. 283)



(29) イチハツ

(p. 285.)



(30) ヒガンバナ

(p. 289)



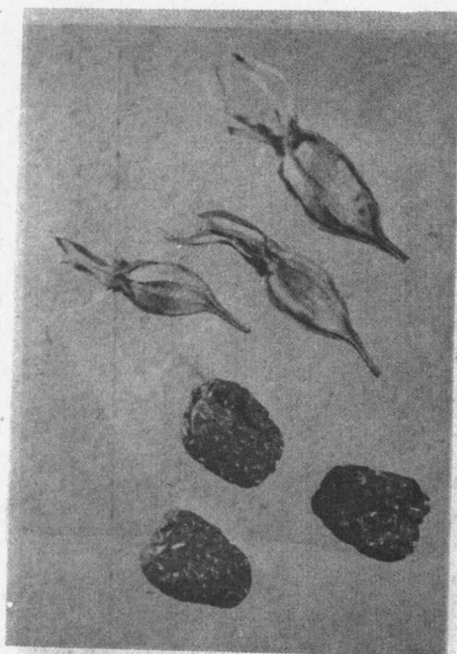
(31) ヒャクブ

(p. 290)

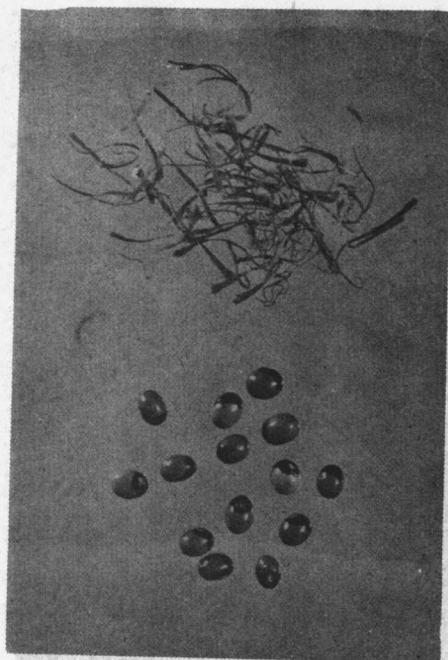


(32) マオウ

(p. 303)



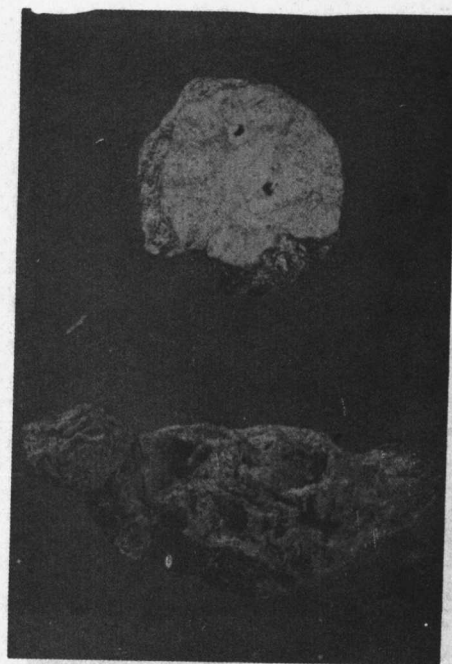
(33) 上 サンシシ (山梔子) $\times 2/3$ (p. 68)
下 タイソウ (大 棗) $\times 1$ (p. 130)



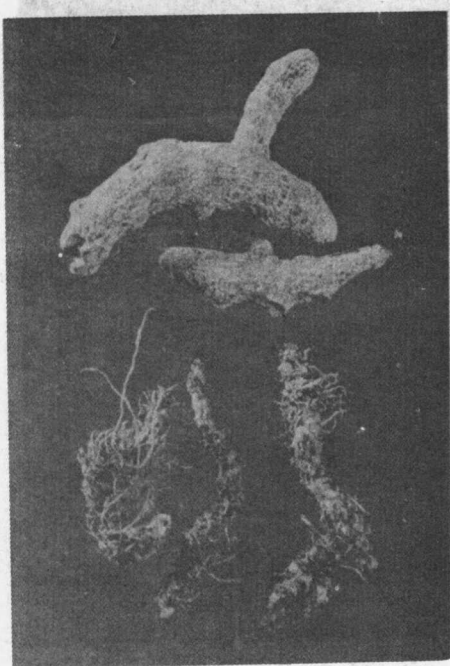
(34) 上 サフラン $\times 1$ (p. 284)
下 ソウシシ (相思子) $\times 2/3$ (p. 174)



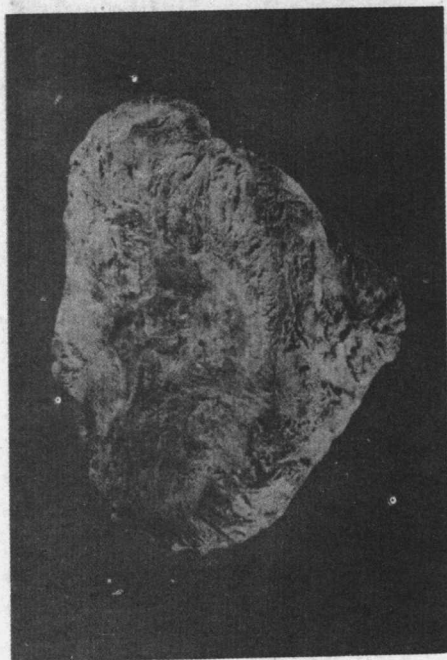
(35) シコン (紫 根) $\times 1$ (p. 61)



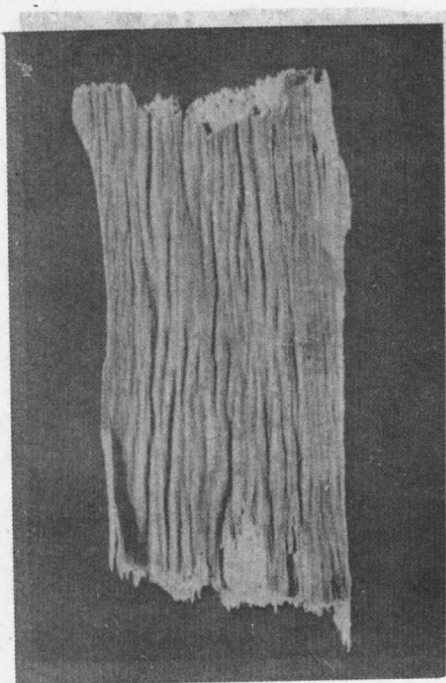
(36) カシュウ (何首烏) $\times 1/2$ (p. 243)



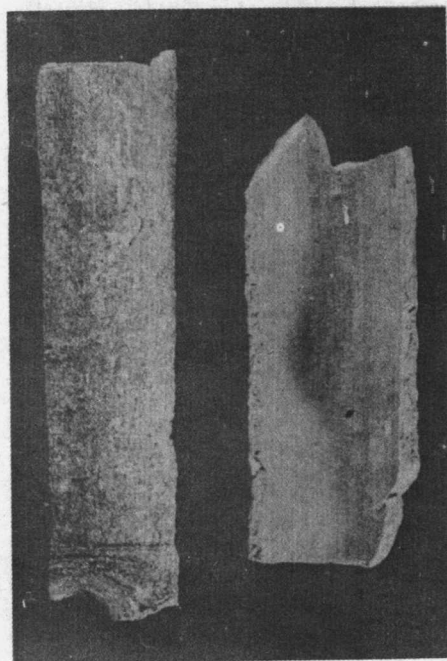
(37) 上 ウコン (鬱 金) $\times 1/2$ (p. 264)
下 オウレン (黄 連) $\times 1/2$ (p. 223)



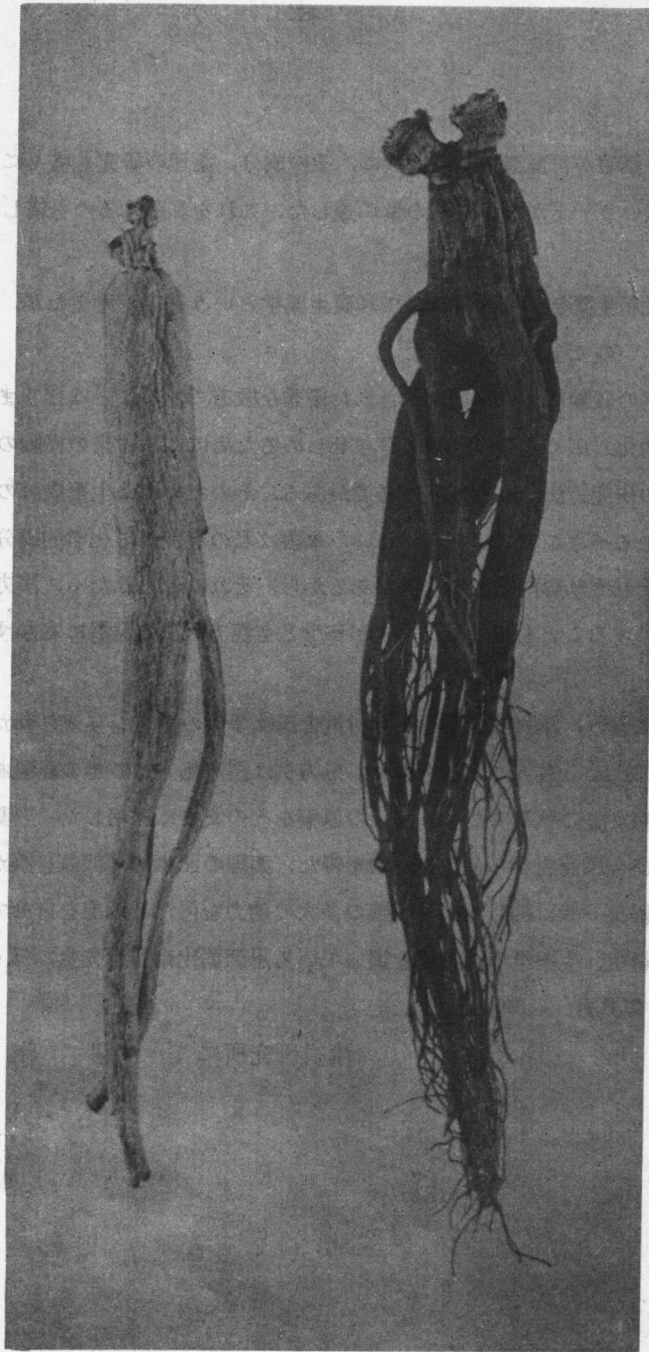
(38) キンモンダイオウ (錦紋大黃) $\times 1/2$ (p. 243)



(39) オウバク (黄 柏) $\times 1/2$ (p. 147)



(40) ケイヒ (桂 皮) $\times 1/2$ (p. 22)



(41) ニンジン (左) 白参 (右) 紅参
× 1 (p. 104)

序

近年、漢薬の価値が再認識されると共に、その成分、薬理の研究も盛んになり、それらの文献を書き留めた私のカードが、かなりの量に達した。これを私蔵するのも惜しまれて本書にまとめることにした。

本書は拙著最新生薬学の姉妹編として和漢生薬学という書名を考えたが、学の子をつけるのもあまりに堅苦しいので学の子を省いた。

漢方は何千年の経験により精選淘汰された優秀な医方であることは言うまでもないが、これを現代の医学に同化し広く人類の福祉に寄与せしめるためには、古来の経験のみに依る方法を改めて、現代科学の研究方法を取り入れる必要がある。そのためには生薬成分の化学的並に薬理学的研究が基礎となるべきことは論をまたない。本書は私の専門がら化学的成分に主要点を置いた。漢方医法にはそれぞれ専門医家の著書があるから、それに依られたく、漢方で言うところの薬効、用法には深入りすることを避けた。本書が多少とも漢方医法の発展に寄与することができれば望外の幸である。

本書の著作に当り、津村順天堂社長津村重舎氏は多大の便宜を与えられた。植物に関し津村研究所佐々木一郎氏から数々の助言を得た。処方例は漢方処方に多年の経験ある中将湯ビル診療所薬局長高橋国海女史の執筆になり、同氏の原稿をそのままに採用した。写真用の生薬は株式会社三国商店および金原商店から多量の寄贈を得た。薬理の記事は芹沢直美嬢が熱心に多数の報文から集録した。編集一般に関し池田和子嬢の多大の助力を得た。以上を併せて深謝する。

終りに臨み終生、生薬学の御指導を頂いている恩師朝比奈泰彦先生に厚く御礼申します。

1970年8月

津村研究所にて 刈 米 達 夫

凡 例

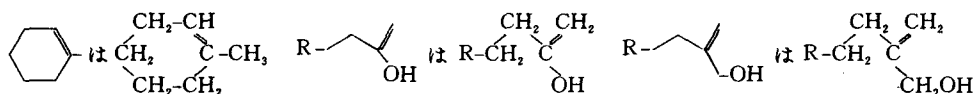
- 1) 生薬の配列は Engler : Syllabus der Pflanzenfamilien (1964) に従い、ただしキク科から始めて双子葉類、単子葉類、裸子植物、陰花植物の順によった。これは薬用植物が双子葉類に多いからである。

同書には従来の -ae で終った科名を -ceae に統一する新科名を旧科名の別名としてあげてあるので、本書にもこれを採用した。たとえばキク科 Compositae (Asteraceae)、イネ科 Graminae (Poaceae)、セリ科 Umbelliferae (Ammiaceae) の類である。ボタン科、ユズリハ科のように従来の亜科から科に昇格したものもある。ウリ科、コシロウ科、ドクダミ科のように位置が大きく動いたものもある。これらについては植物分類学者の間にもいろいろと意見があるようだが、本書には Engler にそのまま従った。

- 2) 各科の中の生薬の配列は重要なもの、普通に市場において取り扱われるものを先にし 1)、2)、3) の番号をつけ (小計 139)、重要性または市場性の低いものはその後に配置して [1)、[2)、[3) の通し番号 (小計 183) をつけた。本書を薬科大学においてテキストに用いられる場合は 1)、2)、3) の系列を講義されるを適當と考える。要するに本書は教科書と参考書の両方を意図したつもりである。
- 3) 成分は有効成分を主とし、薬効に関係がうすいと考えられる成分は省略した場合もある。植物化学上興味ある成分はなるべく採り入れた。成分の構造式もその趣意による。立体式の確定しているものはなるべく立体式を用いたが、立体式であり複雑になる場合は平面式を用いた場合もある。配糖体にしばしば R-O-Gl の書き方を用いた。R-O-C₆H₁₁O₅ (Glucose) の意味である。C-glucoside の場合には R-Gl または R-C₆H₁₁O₅ と書いた。

構造式において下記のような曲点の C およびそれに伴う H または H₂ はしばしば省略した。またメチル基はしばしば短線をもってあらわした。

例：



- 4) 漢方医学における適応症、薬効などを現代医学上の用語をもって表現することはしばしば困難であって、強いてこれを現代的に表現しようとすれば漢方医学、現代医学の両面から観て誤りを犯す恐れがある。ゆえに本書においては効用の欄に漢方の称する薬効をきわめて控え目に書いた。漢方処方ではもっぱら中将湯ビル診療所薬局長高橋国海女史の執筆により、代表的の処方を選びあげた。ここにも現代用語に訳しがたい病名、適応症などは漢方用語をそのままに用いた。数量はグラムを用い 1 日量とし、水 400 ml で 200 ml に煎じつめて汭過し 1 日 3 回に分服する。
- 5) 薬理学的研究論文は津村研究所薬理部芹沢直美嬢の執筆により大要を抄録した。なるべく短かくするために無理をした点も多々あるから原報を参照されたい。
- 6) 成分文献の出所は全体をあげれば膨大なものになるので、最近の文献出所をあげるに止めた。これは最近の文献出所をあげれば、さかのぼってそれ以前の文献をさがし出すことができるためである。したがって中間の文献およびその原報者の名を逸して失礼になる点が多々あることを御許し願いたい。なお、研究

Ⅳ 凡 例

の第一報もなるべくあげるよう努力した。第一報には原植物などについての記載があるためである。

7) 文献は著者名と書名をコロン：で、また1文献ごとにセミコロン；で区切った。同一書名または同一巻数が続くときは次の例により省略した。

薬誌 88, 230 (1968) ; 90, 83 ; 105 (1970)

8) $\text{HOOC}-\text{CH}=\text{CH}_2$ は $\text{HOOC}-\text{CH}=\text{CH}-\text{COOH}$ のように鏡像的に2倍になることを意味する。

文 献 略 名

薬	誌	薬学雑誌	資源研 究 報	資源科学研究所彙報
化	誌	日本化学雑誌 (東京化学雑誌)	乙 卯 研	乙卯研究所年報
工	化	工業化学会誌	塩 野 義 年 報	塩野義研究所年報
農	化	日本農芸化学会誌	高 峰 研 年 報	高峰研究所年報
植	誌	植物学雑誌	武 田 研 究 年 報	武田研究所年報
植	研	植物研究雑誌	日 薬 理	日本薬理学雑誌
生	薬	生薬学雑誌 (薬用植物と生薬)	満 薬	満州薬学会会誌
京 薬	誌	京都薬学専門学校薬窓誌	鮮 薬	朝鮮薬学会会報
富 山 薬	誌	富山薬学専門学校校友会雑誌	慶 医	慶応医学会雑誌
千 葉 誌		千葉医科大学薬学専門部校友会雑誌	日 医 誌	日本医学会誌
日 大 薬 研 報		日本大学薬学研究報告	日本東洋医誌	日本東洋医学会誌
京都薬大学報		京都薬科大学学報	東 医	東京医学会雑誌
東京薬大年報		東京薬科大学年報	千 医	千葉医学会雑誌
岐阜薬大紀要		岐阜薬科大学紀要	福 医 誌	福岡医科大学雑誌
金大薬学年報		金沢大学薬学研究年報	愛 医	愛知医学会雑誌
徳島大薬学年報		徳島大学薬学年報	岡 医	岡山医学会雑誌
東北薬大紀要		東北薬科大学紀要	長 医	長崎医学会雑誌
近大薬紀要		近畿大学薬学部紀要	東 北 医	東北医学会雑誌
名市大薬紀要		名古屋市立大学薬学部紀要	京 医	京都医学会雑誌
科 研 報		科学研究所報告	北 海 医	北海道医学会雑誌
理 研 報		理化学研究所彙報	北 越 医	北越医学会雑誌
衛 試		衛生試験所報告 (衛生試験所彙報)	台 医	台湾医学会雑誌
工 試		工業試験所報告 (商工省工業試験所)	鮮 医	朝鮮医学会雑誌
大 阪 工 試		大阪工業試験所報告	満 医	満州医学会雑誌
東京衛研年報		東京都立衛生研究所年報	日 薬 剤 協	日本薬剤師協会雑誌
朝 試		朝鮮総督府中央試験所報告	薬 学 研 究	薬学研究
台 研		台湾総督府中央試験所報告	軍 医 団	軍医団雑誌
台 研 工	同	工業部報告	獣 医 団	陸軍獣医団報
台 研 衛	同	衛生部報告	化 学 工 業	化学と工業
台 研 林	同	林業部報告	薬 理 誌	日本薬理学会